

神社と近世地域社会

岩城卓二

はじめに

- 一 「庄中」の成立と隅田一族
- 二 「庄中」と宗教者
- 三 「庄中」と供僧の争い
- 四 一八世紀における隅田荘地域社会
おわりに

論文要旨

本稿は隅田荘を対象に、神社祭祀を結合契機とする地域社会が、在地領主連合という中世的世界を解体させ、村役人を運営主体とする村連合へと移行し、さらにその内部秩序を変容させていくまでの過程を明らかにしたものである。内容は次のとおり。

中世において隅田八幡宮は在地領主連合をとる隅田一族の精神的紐帯であり、彼らはその管理と奉仕を独占することによって隅田荘荘民に対するイデオロギー支配を実現していた。この段階では「隅田名乗中」という隅田一族の同族結合集団が唯一の隅田八幡宮の運営主体であった。

ところが戦国期になると、中小農民と宗教者が隅田一族に拮抗する勢力に成長し、隅田荘地域には隅田一族の同族結合集団、中小農民が村を単位に結集した「庄中」、宗教者の「座中」という三つの社会集団が併存し、これを統括するような権力や秩序は存在しなかった。一七世紀とはこのうち「庄中」

が地域社会を統括していくようになる時代であり、それは農民の論理で一元的に地域社会が編成されていくことでもあった。

この「庄中」は氏子村一六カ村の庄屋による合議によって諸事が決していたが、一七世紀には庄屋の専断的な運営が行なわれるような段階であった。この在り方に変化がみえはじめるのが一八世紀後半である。「庄中惣代」が登場し、彼らが藩や他集団との交渉にあたるようになった。庄屋は村の代表として惣百姓の意志に拘束されるようになったのである。

一方、一七世紀において「庄中」に包摂されていた宗教者も、一八世紀後半になると「仲間」を形成し、地域社会のなかで正当な位置付けを獲得するため自己主張をするようになっていった。そしてこうした宗教者の動きによって隅田荘地域社会は、農民だけの論理で運営されるのではなく、異なる身分集団にも正当な位置付けを与える地域社会へと成熟していったのである。